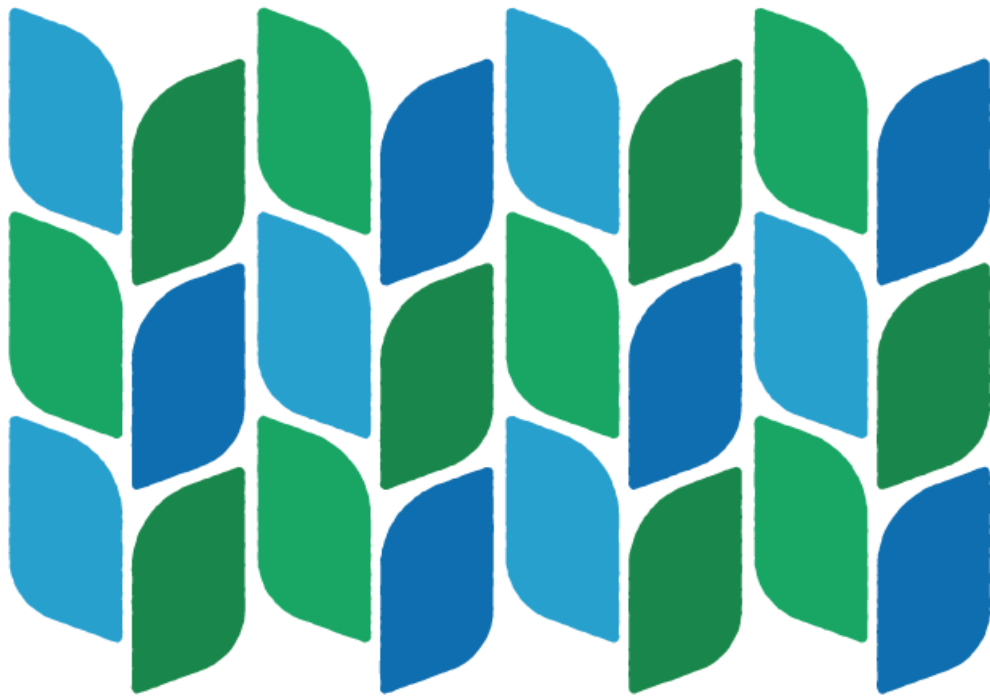


令和7年度 那須塩原市議会「なすの会」 行政視察報告書



視察地 : 三重県四日市市 (NPO法人ライフサポート三重西)
視察日 : 令和8年2月3日
視察内容 : NPO法人ライフサポート三重西の高齢者事業を通じた地域社会づくりについて

視察地 : 三重県明和町
視察日 : 令和8年2月4日 (水)
視察内容 : 日本遺産「祈る皇女斎王のみやこ斎宮」による観光振興の取組について

視察地 : 三重県伊賀市 (伊賀の里モクモク手作りファーム)
視察日 : 令和8年2月5日 (木)
視察内容 : 開園30周年の農業公園「伊賀の里モクモク手作りファーム」の経営戦略について

【参加者 : 小島 耕一 佐藤 一則 金子 哲也 三本木 直人
(日本共産党と合同)】

日本遺産「祈る皇女齋王のみやこ 齋宮」による観光振興の取組について

視察地 三重県 明和町

視察日 令和8年2月4日

報告者 小島 耕一・金子哲也

明和町の概要

三重県の海岸沿い中央に位置し、松阪市と伊勢市に挟まれた人口 22, 589 人、面積 41, 06 平方キロの町で、広々とした田園風景に囲まれ、豊かな海産に恵まれています。また、天皇の代わりに伊勢神宮の天照大神に仕えた皇女「齋王」が住んでいた「齋宮」あった場所とも知られ、平成 27 年に「祈る皇女齋王のみやこ 齋宮」として日本遺産の初年度に認定され、50 年後、100 年後も住み続けられる町を目指して、関係人口の創出や移住定数を推進している。



史跡、齋宮跡と齋王制度について

齋王とは、天皇に代って伊勢神宮に祈りを捧げた皇族の女性のことで、齋王制度は、天武二年（674 年）壬申の乱に勝利した天武天皇が、天照大神に感謝し、大来皇女を神に仕える御杖代として伊勢に遣わしたことが始まりである。この齋王が伊勢神宮に仕えるために、つくられた都が「齋宮」である。

齋王の宮殿である齋宮は、伊勢神宮領の入り口に位置し、都さながらの雅な暮らしが営まれ、飛鳥時代に始まり南北朝時代まで 660 年間続いたと言われている。

史跡齋宮跡の発掘

齋宮跡の言い伝えはあったが、しばらくの間、実際の史跡の確認はされていなかった。たまたま、公共工事で齋宮と思われる遺跡が発見され、昭和 45 年から発掘調査が行われた。昭和 54 年には国の史跡に約 130ha と広い面積が指定され、現在も計画的な発掘調査が行われている。

「祈る皇女齋王のみやこ 齋宮」が日本遺産に認定

文化庁で平成 27 年から開始された日本遺産の初年度に認定された。

平成 27 年から 30 年にかけて日本遺産魅力発信事業を活用し、次の事業に取り組んだ。

- ① 日本遺産パンフレットを作成し、日本遺産の PR を行った。
- ② 町役場のバスや、電車にラッピング広告を行い、広く PR するとともに、駅前などの整備を行った。
- ③ めいわ学習副読本を作成し、学校での郷土学習で子供たちに教えて地元の素晴らしさを教育している。また、子供たちに史跡齋宮の発掘体験をする機会も提供している。



日本遺産を核にした地域連携

① 齋王まつり

毎年 6 月第 1 土曜日に開催しており、本年は 43 回目を迎える。都から遠く離れた伊勢への向かう「齋王」の群行を再現したもので、平安時代の装束と当時の光景を再現するお祭りとなっている。

なお、このまつりは地元の婦人会が開始して毎年開催され、最近では若い方々が参画しているという。

② 伊勢街道まちづくり会

近鉄山田線の南に伊勢街道が走っており、来訪者向けのマップ作成や県道のカラー舗装を行っている。

③ 歴史的資源を活用したウォークアブルなまちづくり

地域DMO法人である明和観光商社が主導となり、伊勢街道沿いに増えつつある空き家などの活用を通じた賑わいづくりを進めている。

④ ART歌舞伎

齋宮を活用し、令和3年8月にART歌舞伎を開催し、令和4年には齋宮にプロジェクションマッピングで平安絵巻を再興した。



現状と今後の方向

年間の入り込み客数は、認定を受けた平成27年の20万人から3年後の令和元年には27万人と順調に増加したが、その後、新型コロナウイルス感染症の拡大から令和2年には12万人に減少した。その後、徐々に回復し令和6年には25万人に回復している。

齋宮跡の来場者数は14万7千人、明和町の魅力として歴史文化と回答する町民が60%と高くなった。

文化庁の日本遺産認定継続において令和6年に「条件付き」認定となった。

日本遺産の継続への課題

- ① 中長期的な観光ビジョンと成果評価・改善の仕組み作り
- ② 観光による地域経済への効果の見えるか

③ 地域資源に対する住民の認知・関心・誇りの希薄化

④ 情報発信力の弱さと観光コンテンツの認知不足

これからの取組

- ① 明和町日本遺産活用推進協議会の再構築
推進協議会を主軸に、各主体の役割整理、事務局機能をはじめとして、脱行政と人材育成を進める。
- ② 観光産業の確立に向けた体制づくり
分野横断的な協働による人材マッチング、産業の創出
- ③ 「心のふるさと」を目指した魅力づくり
地域資源の学びの場づくり
体験型、滞在型環境の整備・支援

所感

明和町では伊勢神宮の天照大神に仕えた齋王の宮殿である齋宮跡を日本遺産とするとともに、地域のアイデンティティーとして子供たちに伝え愛郷心を高めると共に、観光客入り込み数拡大を図っている。また、地元の婦人会が始めた、齋王まつりを毎年、開催し、多くの観光客を集めている。マスコミ等にも広く取り扱われ徐々に齋宮、外宮、内宮といった伊勢街道の順番が広がりを見せているという。

本市においても、大田原市、矢板市、那須町と連携して、「明治貴族が描いた未来、那須野が原開拓浪漫譚」が認定されている。

先日は、らくりん座の演劇、「那須野が原に華ひらく～華族が夢みた大地～」が上演されるなど、日本遺産のPRを続けている。また、千本松農場の松方正義の別荘の萬歳閣を活用した東京八芳園の食事の提供など観光客誘客の取組も行われた。わたしも参加を申し込んだが落選してしまった。もっと多くの人数を希望するところである。

明和町では、婦人会が始めた「齋王まつり」が日本遺産のPRに大きな効果を発揮している。本市においても那須疏水をつくった明治の元勳たちや先祖の方々の開拓の努力に感謝する「なすの開墾まつり」や「那

須野が原開拓まつり」が開催されている。

これらのまつりも日本遺産との連携を強めて、本市の歴史をクローズアップさせることが期待される。また、松方別邸の食事会のような日本遺産の各施設に誘客するイベントを拡大してほしいところである。那須拓陽高校で所有する大山巖の別邸でも昼食を出すようなイベントはできないだろうか。また、乃木希典が愛したなすワインもあることから、ワインの夕べなども開催し、日本遺産の観光面での活用を進めていただくことを提案して、報告としたい。

**「日常生活支援体制の構築による
地域社会づくりに向けた取組」について**

視察地 三重県四日市市

NPO法人ライフサポート三重西

視察日 令和 8年 2月 3日

氏名 佐藤 一則

【四日市市の概要】

●四日市市は三重県の北部に位置し、西は鈴鹿山系、東は伊勢湾に面した、自然にも恵まれた温暖な地域。

戦後は、日本初のコンビナートが立地し、四日市港を中心に産業都市として発展、最近では、内陸部に半導体・自動車・電機・機械・食品など、実に多様な企業が集積する。

代表的な地場産品「万古焼」

昔は東海道の宿場町として栄えた。

●人口 305,599人(146,455世帯)(うち三重西地区17自治会、4,300人、2,005世帯)

●高齢化率

65歳以上 26.4%(うち三重西地区37.5%、新しい2自治会除く15自治会では42.4%)

三重西連合自治会による

相互支援システム構築への取り組み

【取組の契機】

- 1, 三重西連合自治会に高齢者対策を目的とするシニア部が創設された。(平成23年度)
- 2, 社会福祉法人青山里会による高齢者孤立化防止拠点「ぬくみ」が設置され活動を開始した。(平成23年度末)
- 3, 平成24年度に人・物・金がうまく連動した。

- 1) 推進者、協力者の協働
- 2) 事務所の確保
- 3) 地域支えあい体制づくり事業補助金の活用

三重西連合自治会による

相互支援システム構築への取り組み

実施年月 内 容

平成24年 素案作成(シニア部)

5～8月

8月 アンケート調査【三重全世帯】
～高齢者日常生活支援について～

11月 事業説明、会員募集説明(自治会長会議)

11～12月 第1次会員の募集

11月 地域支えあい体制づくり事業
補助金決定

12月23日 設立総会

平成25年

1月7日 運営委員の選出

3月21日 事務所開所 サービス開始

三重西連合自治会による

地域社会づくりのための相互支援システム構築の取組

「ライフサポート三重西」事業発足趣旨書
【趣 旨】

1 自らの生活は自らが守る。

三重西地区が高齢社会本番を迎えている。三重西地区を形成する三重団地が建設以来40年を経過し、当初の入居メンバーが殆どそのまま高齢化し、アンケートでも明らかなように核家族化である。そしてそれは社会的現象でもあるが、自らが選択した生き方であり、出来るだけ長い在宅生活が願望である。その実現のためには自らの生活を守る意思を持たなくてはならない。

1 住民が互いに助け合うサポート事業により安心して住み続けることが出来る町づくりを行う。

この、住み慣れた地域で生涯を過ごすために、日常生活で発生する家事レベルの障害を日常生活圏の住民が互いに助け合う事業を組織的に実施する。そしてこの事業を行うことにより、顔の見える人間関係をつくり、高齢者の孤立化を防止し、放置死を防ぎたい。

この地域を共に暮らし、生活する場所として、安心してしみ続けることが出来るまちづくりを行うものである。

訪問サービス提供表

1	ゴミ出し	1袋	50円
	1)生ゴミ、プラスチック	1袋	50円
	2)資源ゴミ、埋め立てゴミ	1時間	1,000円
2	植木の剪定、草取り等	1回	800円
	軽トラ使用による剪定ゴミの処理	1時間	800円
3	掃除	1回	400円
4	買物送迎	1時間	1,000円
5	救急車等を要請時等救急車の補助 ※高齢世帯安全声掛けネットワークサービス	随時	無料
	A. 警報時、地震発生時、 電話で安否確認	1時間	1,000円
	B. 事前に決められた異常発生のシグナルが確認された時、合意した必要な行動を実行する	1回	2,000円
6	通院付添い	3時間を超過した場合 500円/時加算	
7	戸内外作業 ※買い物代行、粗大ゴミの個別有料 収集の補助などを含む	1時間	1,000円

更なる展開 介護予防・生活支援総合事業
(通所サービスBへの取組)

① サービスの基本方針

日常的に介護予防を行い、特に運動不足による筋力低下を防ぎ(廃用症候群)、要介護状態にならないことを目指す

② サービスを日常的に提供する体制

場所：三重団地商店街(孤立化防止拠点と隣接)

対象：要支援者・チェックリスト対象者

※一般高齢者

回数：週5回

運営主体：NPO 法人ライフサポート三重西

メニュー：健康づくり体操＋各種講座
娯楽型サービス 談話等

【2021年5月21日中日新聞】

コロナに負けず介護予防教室

コロナ禍に負けず高齢者の健康づくりをサポートしようと四日市市の三重団地での住民でつくるNPO法人「ライフサポート三重西」が、介護予防教室や生活支援サービスを続けている。外出や人と会う機会が減ることで認知症の進行や身体機能の低下が懸念される中、感染対策を講じながら活動を継続させようと住民たちが知恵を絞っている。

高齢者にストレッチ、習字やマーじゃん講座

お年寄りたちがいすに座り、腕や足のストレッチ。講師の「頑張るぞー」の声に「はい」と応じ、和やかな雰囲気体操

を楽しんだ。三重平中学校近くにある施設「いきいき塾」平日に開かれ、午前には体操、昼食を挟んで午後は習字や映画、麻雀などの講座が開かれる。

三重西地区を形成する三重団地は建設から四十年以上たち、高齢化進む。三重西連合自治会が高齢者対策を目的とした「シニア部」を結成し、十二年にNPO法人へと発展させた。介護保険制度の住民サービスとして、ごみ出しや買い物を支援、通院援助など身の回りの世話をする訪問型事業と、いきいき塾での通所型事業を展開している。

同法人代表理事の菅瀬博文さん(七一)は「地域の縁が希薄になってきている中、住み慣れた場所で生涯を過ごすために、住民同士の助け合いが必要」と説明する。

新型コロナウイルス感染症が国内で広がり始めた昨年春、継続するか休業するか、決断を迫られた。「健康づくりだけでなく、お年寄りの居場所にもなっている。事業を続ける責任がある。」と菅瀬さん。マスク着用や検温、換気などの基本的な対策のほか、密を避けるため活動スペースを約2倍に広げるリフォームも行った。

通所型の月間延べ利用者数は平均五百人程度。昨年四、五月は三百人台まで減ったが、今年三月は五百四十人と、再び増えてきている。週四回ほど利用する渡辺稔さん(九三)は「家で一人でじっとしているより、おしゃべりして体を動かすと元気になれる。百歳まで生きられそう」と笑顔を見せた。

運営を支える同法人の理事と監事計二十一人も、七十代以上の人が多く、今後の運営が課題という。菅瀬さんは「今後の在り方を考えながら、出来る限り続けたい」と話している。

◎NPO 法人ライフサポート三重西の今後の方向

「在宅ひとり死の可能な地域社会を目指

す」

1) 在宅一人生活を続けるためのライフプランの策定

・在宅医療・介護・生計・家財整理・住宅管理・死生観

・エンディングノートの作成・看取りの場・災害時の対応等

2) 身体異常時の通報発見システムの構築・災害時の安否確認ネットワークづくりを目指す

まず、連合自治会と連携して安否確認通報装置の導入を始めた。(2,500円/月)

今までは知らぬ同士が塾にて言葉を交わせることにより、人間関係の輪は広がっている。今後、このシステムづくりをしたい。

【2025年5月16日中日新聞】

子供の居場所 地域がつくる

児童館 週3日開設「食堂」も月2回

四日市・三重西地区 高齢者施設を活用

四日市市の三重西連合自治会やNPO法人などが主導した「児童館」が、同市三重6の高齢者向け施設を活用してオープンした。毎週月、水、金曜の午後に開設する。同時に月2回の子ども食堂も始め、地域が主体となって子供を育てる環境づくりを目指す。

児童館と子ども食堂はNPOや連合自治会、三重西小、三重平中の校長らでつくる「三重西児童館設立委員会」が、子ども食堂の売上金と、市や連合自治会、三重西社会福祉協議会の補助金、助成金で運営する。「ルンルン塾」と名付けられ、近隣住民でつくるNPO法人「ライフサポート三重西」が運営する高齢者向け施設「いきいき塾」を活用。1階広場ではボッチャやスケッチ、映画など日替わりのテーマで子どもたちが交流する。2階には漫画の図書館や学習スペースを設ける。利用者は無料だが、事前に保護者から同意書の提出を求める。

こども食堂は、同じ建物にある飲食店

「喫茶ふじ」で第2、4日曜に開設する。中学生以下は無料で、高校生以上は300円。開所祝い会では110人が集まり、カレーライスと白玉ぜんざいが無料で振る舞われた。

三重西地区は近隣に図書館や児童館がなく、放課後の居場所が課題となっていた。同委委員長でNPO代表理事は「これまでの子どもの居場所は学童(放課後児童クラブ)か家くらいしかなかった。選択肢が増えることで子どもたちが孤独や孤立に陥らないようにしたい。」と意気込む、

日替わりテーマは今後、高齢者との触れ合いや韓国語を学ぶ教室、読書会なども増やし、「それぞれ毎月1回は実施する方針。連合自治会長は「地域で子どもが集まることが出来る場所をつくっていきたい」と述べた。



伊賀の里モクモク手づくりファームの農業振興の取組について

視察地 三重県 伊賀市
視察日 令和8年2月5日
報告者 三本木 直人

(モクモク手づくりファーム概要)

農業や酪農である「第1次産業」から、ハムや地ビール、パン、とうふづくりなどの加工を手掛ける、「第2次産業」として、それらの製品を直営店舗や直営レストランで販売を行う「第3次産業」までのすべてを自分たちで行う新しい産業のカタチ、「第6次産業」を展開しています。

モクモクの原点は「農業」であり、現在行っているすべての業務が「農業」である。野菜や米、牛乳などの生産から製品への加工、そして、それらを自ら直接生活者へ提供することで、「食」と「農」を通じて、「知る」「考える」輪をもっともっと広げるために挑戦を続けています。

(事業内容)

- ・米、野菜、果樹・しいたけ等の生産
- ・酪農・牛乳・ジェラートなどの加工
- ・ハム・ソーセージ、地ビール・豆腐・パン・洋菓子、和菓子の製造
- ・農業公園の運営(手づくり体験教室・物販・飲食・宿泊・温泉等含む)
- ・食有事業
- ・通信販売
- ・直営物販店
- ・直営飲食店
- ・その他上記に関連する事業

(所感)

三重県伊賀市の株式会社伊賀の里モクモク手づくりファームは1988年の設立以来農作物の有利販売をめざして、商品のブランディングから始まり、その後売り上げを伸ばし現在は50億円の売上高にまでなりました。

通信販売事業で全国の会員数5万世帯直営レストランにおいてはモクモクファーム内の店から大阪・名古屋にも直営レストラ

ンを展開しています。

また子供達への農業理解のため、体験農場、更に宿泊施設等々、着実に成長してきました。

那須塩原の基幹産業である農業を更に発展させるためにも中山間地でのモクモクファームでのこの取組は本市においても非常に参考になるものであるとして報告いたします。